Vol.192　祭りと踊り見聞記　（平成22年9月25日）

祭りと舞、踊りとは古代から深いかかわりを持っていて、神へ五穀豊穣、御加護を感謝して歌舞音曲を奉納し、次の年の平穏無事を祈願したと伝えられております。

やがて神に奉納する舞は、踊りとなって村人達へと裾野を拡げて今日に至ったと思っております。戦後、地方の都市化が進むにつれて、新旧住民の親睦交流の場として重要視され、鎮守の森から街の広場へと所を変えてきました。

昨今は無縁社会を迎え、祭りの存在は市民にとっては欠かせないコミュニケーションの場となっております。

先日「風の盆」から帰ってきた友人がその素晴らしさを興奮して私に語ってくれました。

私もこの富山県婦負郡八尾町には友人達がいて、妻と３度ほど招かれました。
ちょうど高橋治の「風の盆恋歌」がベストセラーになった頃でしたので、人口２万８千人の町に９月１～３日で３０万の人が訪れる祭りとなっておりました。（現在は８０万人とか）

八尾の町は坂の町と呼ばれ、緩やかにくねって、奥へ奥へと伸びてその坂道に沿って、雪流し水が町の軒下の「エンナカ」を音を立てて流れております。

万燈に照らし出された狭い通りは人々で埋まります。しかし「踊り道」には出てはならない厳しい決まりがあります。

越中おわら節の踊りは男踊りと女踊りの型があり、「稲の苗を植え、刈上げ、稲束を放り上げる仕草」であります。

風の盆で最も素晴らしい情景は、朝方３時頃踊り終えて三三五五家路を流して帰る胡弓の音色が哀調があって一番だと高橋治は書いております。

君津のいやさか踊りにも、分かりやすいストリーがあれば踊りやすいと思うのは踊り下手な私だけかも知れませんが・・・。

８月２９日、東京には４つ大きな踊りがありました。国際フォーラムのブロードウェイミュージカル「インザハイツ」がやって来ました。
豊かな筈のアメリカは、多くの乏しい人々がアメリカンドリームを追ってたくましく生きるミュージカルでした。

大音響と躍動感、突き抜ける声量、ユーモアとペーソス、極貧の中で夢を捨てないで生きるフィナーレに涙がこぼれました。

そこで一言ですが「いやさか踊りもフィナーレは踊っていた人も観衆も一緒になって踊ってみませんか」このまちは九州出身の人達も多いので、踊りやすい“炭坑節”に切り変えて、参加者全員が手を叩き、一緒に踊る事によって広場に一体感を盛り上げ、夏の夜のフィナーレとしたいものですね。

３時過ぎに浅草吾妻橋から地上へ出ると目の前に浅草サンバカーニバルの先頭集団がやって来ました。若い女性達の日焼けしたむき出しの裸、山車に積まれた大音響のサンバのリズム５０万人の人出に驚きながら、再びUターンして着いた高円寺駅は身動きできない大混雑でホームから自分の進む方向を選べなくなって、幸運にも押し出されたところは高円寺阿波踊り出発点会場で石原伸晃さんの隣にいました。

高円寺の狭い路地は１２０万人と言われる大群衆で、立錐の余地もない店先で、地元商店街は混雑に負けず大健闘の商いをしておりました。私達も真似なければと思います。

帰りの中央線６号乗車口に立った時、真下に広がる光景は高円寺阿波踊りを見下ろす最高の席でした。「渋谷のスーパーよさこい」はあきらめて帰りました。来年は高円寺阿波踊りを是非ご覧ください。